

日本分析化学会第50年会(創立50周年記念大会)

1 はじめに

日本分析化学会第50年会は、21世紀最初の年会として、また、第50年会の名前が示すとおり本学会創立50周年記念の大会として、2001年11月23日(金)~25日(日)の3日間にわたり熊本大学工学部において開催された。日本分析化学会創立50周年記念式典も年会の中で挙行され、外国からの参加者を含めて全国から1400名を超える研究者、技術者、学生、OBや学会を多方面で支えてこられた支援者の方々などが参加された。日本分析化学会のこれまでとこれからの橋渡しの大会と位置づけ、伝統に留意しながらも、むしろ新しい感覚や息吹を導入しながら手作りの大会として運営することとした。

本大会での講演総数は814件(一般講演459件、ポスター発表275件、若手英文ポスター31件、研究懇談会講演14件、テクノレビュー講演4件、外国人講演3件、ランチタイムセミナー4件、シンポジウム講演13件(そのうち外国人1名)、50周年記念式典での講演2件、受賞講演9件)であった。参加登録者(1313名)に加えて、記念式典出席者、名誉会員、外国人招待者、テクノレビューおよびランチタイムセミナー関係者、展示会出展者などを加えて1500余名)の参加者を得て盛大に開催された。

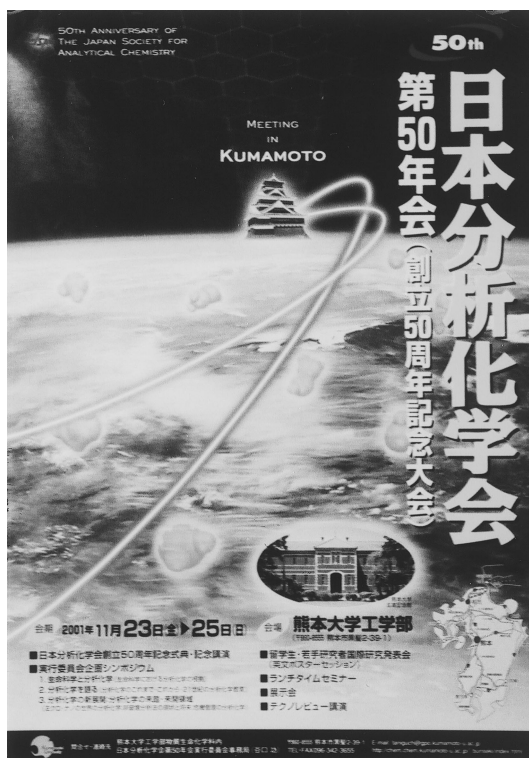


写真1 第50年会ポスター

一般講演は、奨励賞講演、技術功績賞講演、研究懇談会講演と一緒に10会場で同時進行し、さらに外国人講演、ポスター(9時30分~11時30分、13時30分~15時30分)、シンポジウム講演が並列で進行した。2日目の午後は創立50周年記念式典に当て、記念式典、記念講演のほか、学会表彰、受賞講演が行われた。初日午前・午後、2日目午前、3日目午前・午後と9時から18時近くまで講演が行われた。また、今回初めての試みとして、昼食時にランチタイムセミナーを開催した。配布された昼食をとりながらのセミナーは、各会場あふれんばかりの聴衆で実り多い楽しい時間となった。

2 講演

一般講演の分類は、例年どおり26分類として、奨励賞講演3件、技術功績賞講演3件、テクノレビュー講演4件、研究懇談会講演14件は、いずれも関連の深い一般講演と一緒にいった。創立50周年式典で2日目の午後が使えなかったこともあって、発表は3日目の午後まで行われたが、各会場とも熱心に最後まで講演討論が繰り広げられた。

主講演会場とした工学部講義棟の一階の総合受付の正面に展示会場並びにポスター会場の一つを配置し(もう一つのポスター会場もすぐ近くに配置)、主講演会場は2階より上の階を当てた。表1に各分類における講演数を示した。時代の動向を反映して今日の主要な汎用分析手法分野に加えて、環境関連および生命科学関連分野の講演数が多い。これらの講演会場は聴衆も多くこの分野の人口が多いことが窺われる。今回は民間企業からのテクノレビュー講演が少なく、それに替えて後述するランチタイムセミナーを設定した。

ポスター講演は、実行委員会が「若手の会」と連携した企画としての「留学生・若手研究者国際研究発表会」と称した英文のポスター講演を大会初日の午後に設定し通常のポスター講演と並列で進行させた。英文ポスター講演には31件の発表があり、苦しみながら英語で説明する学生や流暢に質問をこなす若手研究者など、留学生、日本人学生、若手を中心とした内外の研究者が活発にかつ楽しく情報交換を行った。本企画の初期の目的とした国際交流・親善の輪が大きく広がったことは大会実行委員会として嬉しい限りであった。

一方、通常のポスター発表は、発表者の申告によって、「一般」、「企業」、「若手」、「学生」等に分けてエントリーいただいた。これは、「留学生・若手研究者国際研究発表会」共々それぞれのエントリー分野で、会長名の優秀ポスター発表を表彰するためであった。審査は、本大会で座長をお願いした先生方、実行委員会関係者など150余名の方々をお願いして、その得点を実行委員会において集計し、発表件数の10%以内の人数になるように高得点者(同点者を含む)を表彰した(詳細はロータリーに掲載)。「一般」5件(対象発表件数81件)、「企業」

表1 講演分類と講演数

講演分類	一般講演件数	ポスター件数	テクノロジー件数
1 原子スペクトル分析	37	12	0
2 分子スペクトル分析	20	10	0
3 レーザー分光分析	28	11	1
4 X線分析・電子分光分析	16	5	0
5 放射化学分析	4	0	0
6 NMR, ESR, 磁気分析	3	3	0
7 熱分析	1	0	0
8 センサー	28	17	0
9 電気化学分析	37	22	0
10 質量分析	9	10	0
11 有機微量分析	4	2	0
12 フローインジェクション分析	24	8	0
13 液体クロマトグラフィー	33	37	1
14 ガスクロマトグラフィー	4	4	0
15 電気泳動分析	32	8	0
16 分離・分析試薬の設計	13	7	0
17 抽出・イオン交換	39	14	0
18 サンプリング, 前処理	6	8	0
19 分析化学反応・速度論的分析	5	1	0
20 標準試料	3	8	0
21 基礎理論・基礎データ	5	2	0
22 環境・地球化学関連分析	58	38	0
23 生体関連・医薬・法科学分析	36	37	2
24 無機・金属材料分析	5	6	0
25 有機・高分子材料分析	7	1	0
26 その他	2	4	0
小計	459	275	4

その他講演：記念講演2件，シンポジウム13件，受賞講演9件，研究懇談会講演14件，外国人講演3件，留学生・若手研究者国際研究発表会31件，ランチタイムセミナー4件，講演総数814件

4件(対象発表件数40件)，「若手」3件(対象発表件数26件)，「学生」9件(対象発表件数128件)及び「留学生・若手研究者国際研究発表会」3件(対象発表件数31件)が選ばれ，発表者には，会長名の賞状と実行委員会からの記念品が，後日，該当者に贈呈された。ポスター会場が講演会場と近いこともあって，午前(9時30分～11時30分)・午後(13時30分～15時30分)ともに講演時間と重なっていたにもかかわらず，多くの参加者によって活発な討論が行われた。

3 付設シンポジウム

本大会では，上記の若手を中心とした「留学生・若手研究者国際研究発表会」企画に加えて，三つの実行委員会企画としてのシンポジウムを開催した。これらのシンポジウムはいずれも日本分析化学会創立50周年記念シンポジウムとさせていただいた。「生命科学における分析化学の役割」，「分析化学を語る」，「分析化学の新展開：分析化学の未踏・未開領域」の三つの付設シンポジウムは，いずれの会場も満席の聴衆を集めた活気あるシンポジウムであった。

1) 生命科学と分析化学(1日目, 13:30～17:00)

テーマ：生命科学における分析化学の役割

生命科学の急速な進歩を支えているのは，今日の高度な分析化学の進歩であり，また生命科学は新しい分析化学の展開を要



写真2 付設シンポジウム(分析化学を語る)

求している。本シンポジウムでは生命科学の最先端や現場での分析化学の役割とその最近の進歩から将来を展望することとし，企画趣旨説明(熊本大工，谷口 功)の後，「生命科学における分析化学の重要性」を薬学の立場から長野哲雄氏(東大院薬)，「臨床医学と分析化学」として医療の立場から岡部紘明氏(熊本大・医)，「ゲノム解析と分析化学」についてその最先端を馬場嘉信氏(徳島大・薬)，さらに「生命科学の将来と分析化学」として新しい生物電気分析化学的手法について，Fred M. Hawkridge氏(Virginia Commonwealth大，USA)から講演いただいた。

2) 分析化学を語る(2日目, 9:30～11:50)

テーマ：分析化学のこれまでとこれからと21世紀の分析化学教育

分析化学の発展は今後共にそれを支えて推進する人の問題でもある。分析化学の歴史を振り返り，また21世紀の広い意味での分析「科学」を考えながら，それを支える人材の育成の観点から今日の分析化学教育の問題点や今後の教育はどうあるべきかを考えた。実行委員会の企画趣旨説明(九大院薬，財津潔)の後，「産学連携と分析化学教育」佐伯正夫氏(富士物産)，「分析化学教育の課題」石井大道氏(元名大・元崇城大)，「分析化学教育への提言」池田重良氏(元阪大・元龍谷大)，「分析化学教育の将来」喜納兼勇氏(機能材料研・琉球大)，「産業界から見た分析化学教育への提言」中村 靖氏(元ジャパンエナジー)，それにシンポジウムの進行をお願いした赤岩英夫氏や大瀧仁志氏も加わってお考えをご披露いただき，参加者からも活発で忌憚のない意見交換がなされた。漱石の言葉を待つまでもなく，今も昔も「教育は建国の基礎にして…」である。参加者の見識の高さと教育への情熱が伝わる極めて有意義なシンポジウムと極めて好評であった。



写真3 留学生・若手研究者国際研究発表会風景

3) 分析化学の新展開; 分析化学の未踏・未開領域(3日目, 9:30~12:00)

テーマ: ミクロ・ナノの世界の分析化学; 非破壊分析法の現状と将来; 危機管理の分析化学

21世紀の分析化学の発展を展望しながら, 分析化学の発展の方向を考える。特に, 急速に展開するミクロからナノの世界の分析化学と分析技術, 社会の中での分析化学の観点から非破壊分析や環境保全とともに重要性を増している危機管理の分析化学について考えることを目的とした。企画趣旨説明(熊本大・工, 谷口 功)の後, 「分析化学の未踏領域」今坂藤太郎氏(九大院・工), 「単原子・分子に迫る」北森武彦氏(東大院・工)がそれぞれの研究成果を基礎に最近の動向とこれからの方向性を提案された。また, 今後の分析化学の展開が期待される「非破壊分析の現状と将来」について佐藤哲生氏(九州農セ), さらに「危機管理と分析化学」について瀬戸康雄氏(科警研)から実例を挙げながら迫力ある話が披露された。

4 外国人講演

本大会では外国人による講演は, ICAS-2001の後でもあり, 特別には設定しなかった。しかし, 名誉会員のProf. Jaromir Ruzicka (Washington大, USA)が参加され, 3日目午前「Micro Sequential Injection: A Versatile Approach to (Bio) chemical Assays Using Lab-on-valve System」と題した外国人特別講演を行った。また, Prof. Fred M. Hawkrigde (Virginia Commonwealth大)は, 第1日目のシンポジウムの中で「Enzyme Coupled Electrodes for Fundamental and Applied Applications」と題した講演を行った。さらに, 一般講演と並行してProf. James D. Burgess (Case Western Reserve Univ., USA)の「Evidence for Preassociation in the Reaction between a Platinum Anticancer Agent and Surface Immobilized Oligonucleotides」とProf. K. Chandrasekara Pillai (Univ. of Madras, India)の「Mechanism of Electrocatalytic Oxidation of Ascorbic Acid on $\text{Mo}(\text{CN})_6^{4-}$ -doped-PVP Modified Polymer Film Electrode」の外国人講演があった。

5 創立50周年記念式典・学会賞等授賞式

本大会のメインイベントの一つは, 大会中の本会創立50周年記念式典であった。大会2日目の午後を記念式典に当て



写真4 創立50周年記念式典・学会賞等授賞式会場風景

た。式典は300人程度収容可能な教室をメイン会場とし, 会場に入れない参加者のためには, モニターシステムを用いて周辺の教室の大型画面に同時放映した。式典は石橋副会長の司会のもと13時から始まり, 高木会長の挨拶, 来賓の祝辞及び内外の関係学会・関係者などからの祝電披露, 50周年記念事業報告に続いて表彰式(名誉会員章授与と並びに感謝状授与)が執り行われた。外国人名誉会員としてJaromir Ruzicka教授に会員章が授与された。引き続き記念講演が行われ, 「分析化学会の歴史」を四ツ柳隆夫前会長が, また「21世紀の分析化学会」と題して高木 誠会長が講演され, 参加者が日本分析化学会のますますの発展を確信して記念式典を終えた。

続いて同じ会場で, 2001年度学会表彰・受賞講演が本多理事の司会のもと15時30分から行われた。会長挨拶, 学会賞等審査委員会報告, 学会功労賞・技術功績賞審査委員会報告, 有功賞審査委員会報告の後, 学会賞・学会功労賞・技術功績賞・奨励賞・有功賞がそれぞれ受賞者に授与された。授賞式の後, 直ちに有功賞受賞者の記念写真を撮影した。16時30分過ぎから池田篤治(京大院農), 中川照真(京大院薬), 本水昌二(岡山大理)の3氏の受賞講演が行われた。午後19時前, 日が暮れ暗くなった中を懇親会会場行きのバスへと急いだ。

6 ランチタイムセミナー・テクノレビュー講演・研究懇談会講演

本大会で初めて付設のランチタイムセミナーを導入した。昼食時に, 企業等からの分析科学・分析機器に関する最新の情報



写真5 ランチタイムセミナー(お弁当を前にしながらセミナーを開く)

を講演会場一室を占有してセミナー形式で十分に時間をかけて説明いただくもので、聴衆には昼食が配布された。昼休み時間を有効に使うことができる利便性のため多くの聴衆が集まった。初日には、VGシステムズジャパン㈱の「マイクロフォーカスモノクロメーター X 線光電子分光装置の紹介」とピーエーエス㈱の「SPR センサと FOXY センサの紹介」が、第2日目には、日本ミリポア㈱の「『超純水』の正しい使い方～あなたの超純水は汚染されています～『超純水装置』の正しい管理法；『超純水』の上手な使い方」と題するセミナーが、最終日には日本分光㈱の「微小領域分光の発展：マイクロ分光からナノ分光へ」と題した4件のセミナーが開催された。いずれも満員の聴衆の中でのセミナーとなった。

一方、本大会ではテクニレビュー講演は4件（分光分析関係および液体クロマトグラフィー関係各1件、生体関連・医薬・法科学分析関係2件）で限定されたものとなった。

研究懇談会講演は、9懇談会の講演が企画され、それぞれの専門分野での最新情報についての討論が行われた。

7 付設展示会

展示会は、製品紹介や企業内容のPRなど、分析技術や分析化学関連研究に役立つ理化学機器・器具、分析機器、計測機器、環境関連機器、情報処理機器、その他関連機器・装置、材料、試薬、図書、新しい分析化学・計測技術、新製品などの情報の展示を目指した。間口180cm×奥行90cm×高さ240cmのブースを1小間とした。昨今の経済情勢悪化の中で、企業会員の皆様の協力を得て、18社から出展いただいた。他に分析化学会のブースや熊本大学サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーからの出展をも得て2教室に準備したブースはすべて埋まった。会場は、主講演会場とした講義棟の一階の総合受付の正面に配置し、参加者が展示会に足を運ぶが便宜を図ったこともあって、数多くの参加者の目を引く展示会となった。

8 ミキサー・懇親会・その他の関連会合

ミキサーは第1日目の夕刻18時過ぎから学生会館一階で行った。外国人や本大会の運営を支えてくれた学生支援者なども加わって、230余名の賑やかな会になった。食べ物は地元の焼酎を出した程度で、特に目新しいものは準備しなかったが、ミキサー本来の若者を中心として幅広い年齢層の人々が楽しく集う会になった。

懇親会は、2日目の学会賞受賞講演が終わるや否や、城副委員長の誘導で市内の会場であるニュースカイホテルにバスで移動し、なんとか19時30分前に始まった。記念式典などで時間が後ろにずれて遅くなったのスタートであったが、後藤・吉田両氏（実行委員会副委員長）の司会のもと、谷口実行委員長、高木本会会長、来賓の熊本大学江口学長等の短い挨拶、さらに関係者による鏡割りに続いて桐栄恭二氏の乾杯で、懇親会の宴が始まった。400名を超える参加者で会場の玉樹の間はいっぱいになり、明るく賑やかな宴となった。宴半ばには、かつて景行天皇をお迎えしたのが始まりとされる気品のある山鹿灯籠お



写真6 山鹿灯籠おどり（懇親会会場にて）

どりが披露されて宴もたけなわとなった。次回の討論会（姫路）および第51年会（札幌）の案内のあと、大倉名誉会員の締めで宴はお開きとなった。さらに、時間に余裕のある方には座って歓談をできるようにホテルの最上階のスカイラウンジで熊本の夜景を眺めながらのひとときを設定した。100名を超える参加者とともに、またひと味違った懇親の時間が流れた。

本大会期間中に、研究懇談会の委員会や役員会、ICAS関連の会議、編集委員会、科学研究費補助金に関連したシンポジウムなども開催された。また、テニス大会も会期前日に設定された。

9 おわりに

創立50周年記念大会としての第50年会を熊本で開催するに際して、大会の2年ほど前に九州地域の実行委員会及び熊本での現地実行委員会を設置して準備を進めたが、昨今の大学の激動期にあって、連日矢継ぎ早にくる仕事に忙殺され、本大会の準備に十分な時間がとれなかった。実行委員の皆様や本部署事務局にはいろいろな面でご迷惑を掛けながらの準備であった。皆様には余り相談もせずほとんど現地委員会、特に実行委員長の周辺（谷口研究室と城研究室）のみで事を進めさせていただいた。ご寛容いただいた皆様に感謝します。

大会を運営する場合に最も気になるのは、当日の天候である。幸い会期中はみんなの思いが天に通じ、すばらしい秋晴れとなった。また、熊本では11月末でも午後18時過ぎまでは十分に明るいことも実感いただけたものと思います。この日和をもって、すべての至らなかつたところをお許しいただければ幸いです。

第50年会のポスターに表したように日本分析化学会が50周年を契機にさらに力強く、また新しい未来への発展を目指して大きく飛躍することを確信しております。

最後に大会の準備に奔走してくれた所属学科の多くの学生諸君や教官各位、日本分析化学会の事務局の皆様へ改めて感謝する次第です。

〔第50年会実行委員会事務局・実行委員長 谷口 功〕